西光寺だより

第三十六号　平成二五年　八月一日発行

真夏の日差しが照りつける中、ひまわりが空を仰いでいます。

八月の青い空に向かって茎を真っ直ぐに伸ばし、大きな黄色い花を咲かせるその様は、夏を代表する花ならではの堂々とした佇まいです。

しかし、実はひまわりは一つの花ではなく、多数の花が集まって花の形を作っていることをご存じでしょうか？

黄色い花びらの部分は舌状花（ぜつじょうか）、黒っぽい中心の部分は筒状花（とうじょうか）と呼ばれ、この花びら一枚一枚が独立したひとつの花で、中心部分の筒状花も小さな筒状のものひとつひとつが独立した花だそうです。ですから、大きな一輪の花に見えるものは実際には異なる二種の小さな小さな花がたくさん集まってひとつの形をつくっているといえます。その数とはどれほどのものでしょう。

植物も動物もそれぞれ生き抜くための術を持っていますが、ひまわりはひとつひとつが小さいからこそ集まり合い、夏の暑さにも負けない大きな生命力を持ち続けているのでしょう。たとえひとつでは小さく弱い存在であっても、互いが協力し合うことによって大きな強い花になることが出来るのでしょうね。

そして、そのためにはきっとひとつひとつがそれぞれの花を懸命に咲かせているのだと思います。精一杯のいのちの集まり、だからこそひまわりは、あんなにも堂々と太陽に向かって咲き誇っているのかもしれません。

わたくしたち人間も、一人ひとりがひまわりの一枚一枚の花のようにただただ懸命に生きてまいりましょう。空から眺めると、きっと私たちも太陽にも負けないほどの大きな生命のエネルギーに満ちあふれているのではないかと思います

◆八・九月の行事◆

・八月　十五日（木）　盂蘭盆会法要　午後六時～　西光寺本堂

・九月～　在家報恩講

＊毎月の月参りの日に在家報恩講としてお参りさせて頂きます。

・九月　十二日（木）　大谷本廟墓参（みのり講・ほづみ講）　午後二時　大谷本廟お茶所集合

・九月　二十一日（土）　仏教婦人会報恩講　午後一時～

●今月のことば●

「一心」

限りある命だから
蝉もこおろぎも
一心に
鳴いているのだ
花たちも
あんなに
一心に
咲いているのだ
わたしも
一心に
生きねばならぬ

（坂村真民　『宇宙のまなざし』）

蝉もこおろぎも、路傍の名も知らない花にも、与えられたいのちがあります。その短い限られたいのちであっても、蝉やこおろぎはただただ一心に鳴いて全うします。花たちも短い生涯を一心に咲いて、生命を謳歌して落ちゆくのです。私も限りあるいのちを一心に生きたいものです。生かされているこのいのち、自分だけのいのちではなく、父母のいのちを通して多くのいのち、ご先祖に繋がっているのです。

今年のお盆も、亡くなったご先祖を偲んで手を合わせ、かけがえのないいのちをいただいていることに感謝しながら、お念仏をさせていただきたいと思います。

◆あとがき◆

お盆になるとよくある質問がお仏壇の荘厳についてです。質問の中には、「ご先祖が帰ってこられるから」「お迎えしてお見送りしなくては」といったものもあります。ズバリいうと、浄土真宗には「亡き人がお盆の期間だけ、家に帰ってくる」という考え方はありません。ですから、故人を迎えたり送ったりするという迎え火や送り火、故人の乗り物とされるキュウリの馬やナスの牛なども一切不要です。お仏壇の荘厳の基本は三具足（花瓶・ろうそく・香炉）です。

浄土真宗では、お念仏を喜ばれた大切な人は、阿弥陀さまのおられるお浄土に生まれ、仏さまとなられています。お浄土に生まれた大切な人は、お盆の期間だけではなく、仏さまとしていつでもどこでも私に寄り添い、迷いの世界にいる私をさとりの世界（お浄土）へと導いてくださるのです。

ですから、浄土真宗のお仏壇は、大切な人や私自身をお浄土へと救いとり、仏としてくださる阿弥陀さまが中心です。亡き方を偲ぶ中で、阿弥陀さまのみ教えに出逢ったならば、それは「亡き方が今生の命にかえて伝え残してくださったのは、私自身を救ってくださる阿弥陀さまのみ教えである」といただくことが出来るのです。

そして、その教えに遭わせて下さった亡き方のご恩を思う。それが浄土真宗のお盆なのです。どうぞ家族そろって手を合わせ、お念仏する機会をつくっていただきたいと思います。

合掌

浄土真宗本願寺派　白毫山　西光寺
大阪府茨木市西河原一―七―二
電話　〇七二―六二二―四七九四
FAX　〇七二―六二二―九二九一
http://www.osaka-saikouji.net/